
靴の歴史～ヒールの変遷から～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市田 京子

はじめに

靴の歴史をみる時、機能性と服飾性は大きなポイントであろう。この二面は競合するものではなく、相互の発達を促しあうものであったはずである。

筆者は長く日本はきもの博物館（以下、博物館と略）の学芸員をつとめ、その収蔵資料の保存や展示に関わってきた。その中で、欧米の歴史資料を扱う時、新しいスタイルを求めることがそれを可能にする技術を生んできたという思いを強くしてきた。ここでは、その靴の変遷、発達をヒール（外底踵部に付けて足を持ち上げるもの）を通して紹介してみる。

1. 対象資料の概要

ヒールの出現は16世紀末期といい、その要因は諸説あるが、西アジアの騎馬民族が鐙から靴が滑らないように踵に付けた楔形の革の影響ともいわれている。いずれにしても、現在のヒールをもたらししたのは、それらの要因が触発したヨーロッパ・ファッションの高さへの欲求であったろう。ヒールは17世紀の宮廷ファッションの展開の中で形を成していき、18世紀に形を整えている。

博物館では、1978年の開館以来、外国の靴資料の収集にもつとめており、「歴史資料」としている欧米のシュー・ファッションを伝える資料も441点ある。その内訳は、

17世紀まで10点、18世紀54点、19世紀172点、20世紀205点となっており（注1）、ある程度時代の変遷を追える内容をもっているといえるであろう。

外観上形態の明瞭なヒールの変遷は、時期的特徴を捉えやすく、筆者は、古いことであるが、1997年の企画展で「ハイヒールの系譜」展として取り上げたことがある。この展示では18世紀から1970年代までの流れを、その特徴をとらえて、「ルイヒール」「再生したヒール」「完成したヒール」「露出するヒール」「成熟したヒール」「突出するヒール」と区分してみた。今回もこの流れで紹介する。

なお、掲載する写真は記載のないもの全てが日本はきもの博物館所蔵である。

2. 18世紀のヒール

18世紀のヒールは曲線的な側面形に特徴がある。この優美なヒールは「ルイヒール」として現在も基本形となっているが、この呼称は19世紀後半に復活した時、フランスの「ルイ15世時代のヒール」ということをついたという。

初期には10センチ前後の高さの細いヒールで、細く尖った爪先にむかって下りる硬い革底とあわせて、まさに「爪先立ち」しているような不安定さがあった。17世紀のヒール（写真1）と比して、上端部の広がり際立っていることがよく分かる（2、



1. 1665年頃のミュール



2. 1720年頃／バータ・シュー
ミュージアム所蔵



3. 1740年頃

4.18世紀のヒールの変遷



①1720～30年



②1720～30年



③1780年頃



④1770～80年



⑤1795年頃

4①)。ヒールは、踵というより、土踏ま
ずの位置に付く形になっているのである。
ヒールの中央で体重を支えようとするこ
とが、曲線的なヒールを生んだといえる。そ
して、シャンクやカウンターにあたる保護
材のない靴の機能性を、このヒールのカー
ブで補ったといえる。この時期、靴の底革
は厚みのある硬いもので、基本的に左右の
別がない。このことを靴研究者ジューン・
スワン氏は the innovation of 'straights'
と記している（注2）。

1730年頃になると、ヒールは太さを増し
やや低くなっていく（3、4②）。この安定
感のあるヒールは60年頃まで続き、残され
た資料の中で最も多いと思われる。60年代
頃から次第に細くなっていったヒールは、
70年から80年頃、再び細く高い華奢なも
のになっていく（4③・④）。この時期の靴は、

爪先も接地部が小さく、ほとんど自立しな
いほど不安定である。その反動のように、
90年代になると、ヒールは非常に小さく低
いもの（4⑤）になり、世紀末から次世紀
に入ると姿を消していくのである。

装飾性豊かなロココ様式そのままに、靴
も、ドレスにあわせた豪華なシルクや高価
な革が用いられ、緻密な技術の刺繍で飾ら
れていた。そのファッション性を支えるも
のとしてヒールが求められたが、そのため
の技術はまだ未熟だった。この世紀のヒ
ールの変遷は、爛熟期から市民革命へと向か
う社会の変化に呼応しているようでもある。

3. 19世紀のヒール

19世紀前半は基本的にフラット・ソール
の時期で、ヒールが戻ってくるのは世紀中
頃である。そのヒールは、フラットなまま



5. 1850～60年頃



6. 1900年頃

る(7-②・③)。この頃には、靴底土踏まず部には硬い革と思われる芯が入られるようになる。シャンクの機能が意識されていることがうかがわれ、写真7の②と③の側面形の違いにみえるように、土踏まず部が立ち上がるようになっていく。そして、90年代末には高さ10センチに近いハイヒール(7-④)も登場してくる。ただ、ヒールの形状には18世紀の残影がみえる。

資料の性格上、外観と手触りでしか観察できないため、土踏まず部の芯の素材を確

7. 19世紀中頃から20世紀初期のヒールの変遷



①1850年頃



②1870年頃



③1875年頃



④1890年代末



⑤1900年頃



⑥1920～30年

の底の踵部に小さな支えを付け足したかのもの、高さも3センチ前後であった。写真5は積み革で、7-①はコルクをアッパーと同じシルクサテンで巻いてあるが、平らな底が見てとれる。

ヒールが再生するのは、やはり、時代の欲求だと思われる。経済的発展はファッションにも大きく影響し、美しくあろうとした時、靴にはヒールが求められたであろう。

再生したヒールは次第に高さも取り戻して完成にむかうが、そのためには体重を支える機能が必要であった。そのことが「ルイヒール」への回帰をよんだのか、形状の美しさを求めると曲線にいたるのか、70年代になると曲線的なヒールが付くようにな

かめることは出来ないが、その硬さの変化は20世紀に変わる頃にあったと思われる。写真7-⑤では金属と思われるしっかりした芯が入り、底革の左右も明確なものになっている。6のようなシルクサテンのブーツもしっかりした芯のカウンターで形もとのい、機能性をもって完成したといえるだろう。

4. 20世紀のヒール

靴にとって画期的であったのはスカート丈が短くなったことであつたらう。裾から垣間見えるものだった靴がスカートの外に出たのである。そのことが靴のスタイルに与えた影響は大きかったと思われ、見られることを意識しヒールは様々な姿を生んで



8. 1920年代



9. 1950年代後半



10. 1968年頃

いく。

「露出するヒール」とした20～30年代のヒール(7-⑥、8)は、土踏まずを離れて、踵の下で支える位置にあるようになる。この位置に達するために長い努力を要した訳であるが、制約を解かれて安定感のあるハイヒールが生まれたといえる。裾広がりカーブをもつものや直線を描くものなどデザインも多様化していく。

これまでヒールの芯はコルクや木であった。形を作り易く軽かったが、体重を支えるうえで一定の太さが必要であった。ヒールの美しさを実現するために重要な細さにはまだ制約があった。最後の制約を解いたのがスチール芯であり、50年代に出た「ピンヒール」(9)は靴の優雅さを実現した。ここにヒールの成熟した姿がみえるだろう。

60年代になると、ファッションそのものに革命的变化があり、靴も大きく姿を変えた。その厚い底には高いヒールが伴い、そのうえ太さも強調された(10)。存在を誇示するようなヒールを「突出するヒール」といわせてもらった。

この後は、ファッション全般とともに、ヒールも時代を画するというより、ヴァリエーションを増やし個性を競うようになっているようである。

おわりに

古代のギリシャ悲劇では主役が履き、16世紀にはチョピンとなり、フェラガモも挑

戦したのは、ヒールを持たない厚底であった。これは自らを主張しつつファッションナブルであろうとした時、足元に高さが求められたことを示し、それを軽やかに実現したヒールに、まず狂喜したのが、かのルイ14世であったことはうなずけることである。

18世紀に女性の専有ともなったヒールが完成していくまでをたどってみたが、もちろんヒールは靴の部分であり、靴の歴史の中で捉えられるべきものである。前号の宇留野氏のご論考(注3)にあるように、左右の違いについても、ここで述べたことが全体をカバーするものではない。古代から左右の違いは意識されてきたが、ヒールとの連動性の中で独自の流れを作ったと考えられる。

注

- 1) 詳しくは、市田京子「収蔵資料のまとめ～世界の靴の歴史編～」『(財)遺芳文化財団・日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館年報13』(2007年)を参照してほしい。
- 2) June Swann "Shoes", B.T.Batsford Ltd, London (1982) P. 7
 ジューン・スワン氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わった。
- 3) 宇留野勝正「左右同型靴の史的考察」『かわとはきものNo.153』東京都立皮革技術センター台東支所、2010年